

友史会2024年2月例会

特別陳列「刀匠 河内國平の仕事－古代刀剣復元から現在の作刀まで－」

令和6年2月18日(日) 13:30～16:00

会場：奈良県立橿原考古学研究所講堂

講演：河内國平(刀匠) 「日本刀の魅力」

対話形式：河内國平・伊東菜々子(橿考博) 「作品解説」

河内國平・宮崎政久(日本刀歴史・文化研究家)「日本刀のいろは」

(感想文)

令和六年の「特別陳列」は考古学博物館である橿考博としては趣の異なる展覧会でした。

現代の刀匠、河内國平氏の古代刀剣から日本刀までの作刀の変遷を追った展覧会です。これに関連する二月の講演会も従来の型式とは異なり、三つの演題ともに河内國平氏が登壇していました。したがってこの感想文も演題に拘らず、印象に残ったことを順不同で記します。

現代の刀匠という言葉から受けるいかめしいイメージとは異なり、河内國平氏のユーモア溢れる話術には脱帽しました。

まず日本刀の定義。直刀である上古刀を含む、平安後期・鎌倉初期から江戸幕末まで十段階の反りを持った刀を並べたスライドを示し、平安後期・鎌倉初期以降の反りのある刀が日本刀であると明言されました。

直刀である上古刀は日本刀に入らないということです。反りを持った日本刀は、平安後期に勃興した戦闘集団が実力をつけ、政権を持つに至った武士と共に存在してきました。現在は武器ではなく、危険な魅力を放つ美術品として存在しています。

日本刀がなぜ反りを持つのか。河内國平氏の講演を私なりに解釈すると、焼き入れ前に、火造りした刀身に焼き場土を刃側に薄く、棟側に厚く盛り、乾燥後、加熱・急冷（焼き入れ）をします。土盛

り厚さの違いによって刃側と棟側に冷却速度に差が生じて、急冷する刃側の硬いマルテンサイト変態によって膨張し、徐冷する棟側に生じたパーライト組織が収縮することで、日本刀独特の反りが生じるとのこと。

刀身への焼き場土の盛り方にそれぞれの刀匠の個性があり、刃文の違いが現われるとのことでした。マルテンサイト、パーライトという用語を退職後、久しぶりに聞きました。

国宝・七支刀の製法に鑄造説と鍛造説の二通りの説があり、河内國平氏は七支刀のレプリカを鑄造と鍛造の二つの製法で復元しています。

講演中、河内國平氏は国宝・七支刀が下から約三分の一の位置で折れており、その折れ具合から、鑄造説を明らかにしました。とても重要なことを聞いた気がします。硬くて脆い鑄造品の折れ方であるとの考え方です。

私もこの考え方がよく解ります。金属材料は私の専門外でしたが、技術者であった者の周辺技術の一般的知識レベルで言えば、写真で判断する限り、七支刀はポッキリと折れており、鑄鉄特有の脆性破壊のようです。極端な例えを使うと、煎餅を両手で割った際の破面に似ています。一方、七支刀が鍛造品ならば強靱ですが、少し延性を持ちます。ポッキリと折れることは考え難い。これも極端な例えですが、僅かに硬くなった餅を無理やり、折った際の破面を想像してください。

国宝・七支刀の材質が鑄鉄か、鍛鉄かの判定には、金属組織の顕微鏡観察等の様々な方法があり、技術的には困難はありません。しかし、社会的には極めて困難、もしくは不可能です。小片といえども、国宝から試料を切り取ることは許されません。

河内國平氏は七支刀の他に、藤ノ木古墳出土の飾り大刀（直刀）の復元もされており、考古学へ大きな貢献をされました。当日の同氏の講演は非常に興味深く、且つ楽しい時間でした。本当にありがとうございました。